

『武道伝来記』論 その四

佐々木昭夫

十二

巻三の第一「人指ゆびが三百石」は一読して軽く明るい印象を受ける。それが作者西鶴の意図だったことは作品から明らかである。ここには待同士の意地の葛藤もそれほどしつこさを持つわけではなく、永年に亘る情念がまざまざと描かれることもない。敵はみごとに討たれるが、ここではそれが読む者になんらかの感動を与えるわけではない。とは言えこの一話がそれほどないがしろに書かれているわけではないことは、例えば同様に軽い一話、巻八の第二「惜や前髪箱根山嵐」などと比較しても明らかである。作者が力を入れて書いている箇所を探していくことにする。

冒頭はこう始まる。

草蒲の節句は幟甲のひかりをかざり。屋形町は殊更び々し
く……

前話巻二の第四は、悪者が退治されて一応目出たい終りを示しているとは言え、悲劇性がいささか解消されてしまったわけでもなく、何となく暗い雰囲気が消えなかったのに、巻が改まるとにわかにはさわやかな初夏の風が吹き込むかのような新鮮さがある。

と続いて本題に入っていく。

「恋の山」の語は後に展開する仁七郎と木工左衛門の衆道、特に木工左衛門が討たれたあとと兄分の敵を狙う仁七郎の真情を予告するが、この冒頭部では文章の表面に或る明るい楽しさを軽く付与する役割を果たしている。次いで語られるのは、律儀で質朴な老武士伊織の過去青年時代のささやかな武勇談が公けになり、彼が面目をほどこすというエピソードである。次のように書かれる。

五日の未明より家中残らず大書院に相詰大殿唐獅子の間に御安座あそばされ近習の諸役人怒かしく列座して独りく召出させられ目見へうけさせられ御手づから御菓子をはかる事御作法なり。伊織罷り出て首尾よく頂戴仕る時右の人さし指のなかりしを御らんあそばし。其方が指はと御意あそばされし時跡へしさりて若ひ時の過とばかり申上る。

ごくありふれた家中の儀式である。広間にぎっしりと居並んだ

藩士たち、小部屋に安座した藩主、いかめしく列座した側近の武士。「未明より」「家中残らず」「相話」の語は何かただならぬ重大なことが行われているかに感じさせ、「怒かしく列座」の特に「怒」の文字がこの場を覆う緊張感をさりげなく強調する。だが人物にいかにも緊張感があるうとも、読者の心中にはむしろのどかな気分が漂う。作者には余裕があり筆先にはかすかな微笑が残る。それは嘲笑といった敵意ある笑いではなく、好意さえ感じられる。この大袈裟な儀式で一人一人殿様から親しく拝領するのが「御菓子」というのが滑稽だということではない。「御作法なり」つまりこの藩でのきまりというのだから。だが「御菓子」よりもっと価値の高いものだったり、逆に全然無価値のものだったら、あるいは藩士によって異なる品物だったりすれば、ここに生まれる気分は微笑をささうようなものではなかっただろう。

「伊織罷り出て首尾よく頂戴仕る時」この「首尾よく」はこんな場合のきまり文句で、あとの「仕る」と同じ敬語的表現だが、この語は伊織の心中にあった、いやこの場自体に存在した緊張感に読者の注意を向け、それは例のかすかに感ぜられる半ば好意的な微笑をささう働きも持つ。

殿様が伊織の右手の人さし指がないのを見てどうしたのかと尋ねたというのは、伊織は側近の侍でなくこれまでずっと「外様の番所」に勤めていたからだし、年に一度のお菓子を給わる儀式でも今までは殿様も気付かなかったか、気付いても別に聞いてみる気にもならなかったか、ともかく今日それを尋ねたのはとくに気になったというわけでなく、ふとした出来心のように不審を感じたにすぎない。だから伊織も後退しながら若い時の過ちでございませうとしか言わなかったのだらう。この主従の問答「其方が指はと御意あそばされし時……若ひ時の過とはかり申上る」は、直

接話法とも間接話法とも言える西鶴独自の　　ということにはつきり作者としての目的意識をもって書かれた　　会話である。もっとも実際に殿様の発言したのは「其方が指は」の八音だけだったとも言えるし、伊織の「若ひ時の過」も、後退しながら小さい声でぶつぶつ言っただけだから、そのあとに続いた言葉が殿様には聞きとれなかったとも言える。だから直接話法の性格が強い。儀式の席上での、普段とくに親しいというわけでもない主従のやりとりといった、まことにありふれた光景であり、それを描く西鶴の筆はのびやかで、豊かながら過不足なく、読む者は一種の生理的快感さえ感じる。これは書き手の気が伝わるのだ。

文章のこうした性格は大目付の豊田隼人が大殿に語る説明にも続いている。

折ふし御ぜんに豊田隼人といふ大目付有合せ。伊織指の義は古主相州さまに罷在し時同じ家中島本権左衛門と申者の留守をかんがへ。夜盗あまたしのび入財寶をうばひとりそれのみ其老母をさしころしうら道を立のく節

傍線を付した文字が全体の語調とは違って、隼人の口調が幾分残るかのようである。もちろん隼人の言葉そのものではなく、単にそれを暗示するのみだが、最初は語り手の声、口調、顔の表情まで彷彿たらしめる。だんだん傍線は間遠になって見えなくなりいつの間にか地の文と分けこみ、読者は隼人の報告なることを忘れ、伊織の過去の武勇談へ続く、その珍しさ面白さに引きこまれるが、「伊織十八の年と申あぐれば。」で現実に戻る。そしてこれは簡潔にきわめて要領よく、必要な事柄をすべて語りながら、読者にはそれを感じさせない。「其老母をさしころし」とは、伊

織の功績の価値を高め、彼が盗賊共に対して苛酷すぎたのではないかとこの疑惑など、間違っても生じさせない。「伊織二人とらへ両脇にはさみ」とは、当時の侍にはいくらでもできたはずで驚くに価しないが、盗人が「身のせつなきまゝに指を喰切どもはなさず。」はどうか。今日の我々には考えられませず、当時の人にとつてもおそらくそうで、侍なるものの恐ろしさを感じさせるが、全くあり得ない事ではなかったとも考えられる。だが重要なことは、強盗の被害に遭った鳥本権左衛門は伊織にとつて同じ家中というだけの間柄であり、伊織はまだ盗賊団が鳥本の老母を刺し殺したことも知らないという事実である。要するに伊織はただ偶然「野ずゑを通りあはせ」たに過ぎない。追ってきた権左衛門若克が「それ盗人頼みます」と叫んだので細かい事情は知らないままで二人とらえた、いわば第三者なのだ。だから指を喰い切られても両腕をゆるめず、しかも「子細聞届て縄をかけ権左衛門屋形に渡し。」と指のことなど忘れたように冷静沈着に振る舞っている、というのはいやほり大変な手柄である。伊織のこのときの行動はどのように簡潔的確に語られ、何の疑念も残さず、すべてが青年伊織の行動の完璧さを示す。それに続く「其比若年にしてよくも仕りける」という藩主の言葉には、このような部下は藩主としてまことに貴重な存在に感じられたに違いない、その満足感とよろこびがある。このあたりの筆には作者西鶴の余裕が感ぜられると前に述べたが、それはこの一話の未来がめざましい仁七郎の手柄で終り、木工左衛門が打たれたこと以外消してしまうことのできない悲劇が背後に多くひそむということがない、『武道伝来記』のうちでも数少ない明るい一話だという作者の意識から来るものである。しかも巻一の第四のように、作者自身が感動のあまり昂奮の極に達し文章またそれを反映するという話ではなく、あくまで

おだやかに拍手を送るべき一話となっている。

この一話から才筆ぶりの際立っている箇所を他に求めると藤村佐太右衛門が伊織の面目にケチをつける罵言がある。

藤村佐太右衛門といふ男、人の咄しを外になして先新しき事は伊織養子に仁七郎行に極れり。此若衆も念者に指切てとらせれば。又三百石御加増取べし十本切は三千石が物。食は人にくゝめられても知行になる指を切給はんかと大笑ひして。

悪人の大言壮語が生彩を放つて紹介されているのは、前話「命とらるゝ人魚の海」での、青崎百右衛門の苦虫をかみつぶした顔を彷彿させる憎々しげな言葉があった。ここでの佐太右衛門は一人で「大笑ひして」の罵言である。また「下戸の口から」と酔っ払つての放言ではないことを記しているから単なる冗談ではなく、伊織の幸運へのなみなみならぬ羨望から来る悪意に満ちた大笑いである。さらに佐太右衛門の意識のうちには、武士たる者指を喰いちぎられたくらいで捕らえた盗人をつとり逃がしたりするものが、三百石御加増になるならその位のことには俺にだってできるという無責任な判断があると想像し得る。伊織の働きが全く無償の犠牲的行為で、しかも盗人が権左衛門老母を殺したことをまだ知らないから、伊織自身、自分の行為にどんな価値があるか知らなかったという事情を全く無視している。前話の青崎百右衛門の言い分に一分の理があつたのと違って、佐太右衛門の大笑いはひたすら我執に満ちて醜く無神経なだけである。悪人像を描き出すのは西鶴の得意とする処だが、「知行になる指を切給はんかと大笑ひ」と佐太右衛門の声調さえ感じさせる一句に凝集する簡単な言葉で、明瞭的確にこの男の人柄まで粗描してしまふ西鶴の筆力

に驚く。

駒谷木工左衛門と佐太右衛門の決闘場面は次のようになって
いる。

今はひかれぬ所にて弟佐太九郎と心をあはせ。木工右衛門に
渡りあひそもくより助太刀うしろには下人を四五人まはし
置ぬ。木工右衛門随分はたらきぬれ共病あがりにして氣勢な
く。初太刀は勝をえたれ共。相手大勢なればつゝにうたれて
哀れや。

「随分はたらきぬれ共」「初太刀は勝をえたれ共」のやや卑近な
語調が決闘を实見した者の報告の感を与え、その報告者は木工左
衛門びいきである。「初太刀は勝をえたれ共」は一層印象的であ
る。今日の我々には意味はよく分らない。「初太刀」の語だけ
なら巻五第一にもあるが、初太刀は少々の勝ちがあつたとどう
いうことが、下人の一人や二人斬つたところで勝ちとは言えない
から、弟の佐太九郎か他の有力な助太刀でも倒したというのか。
これはおそらく半ば専門的な言葉だが、そのため一層無責任な野
次馬による、斬り合いの戦評めいている。意味は明瞭でなくても、
その気分調子だけは残り、この一句がこの場面にある現実味を帯
びさせているのは確かである。「相手大勢なればつゝにうたれて
哀れや」の「哀れや」の語、直前に「つゝにうたれて」があるた
め、これは憐憫の感慨を述べるだけでなく、うたれた直後の木工
左衛門の死体の様子さえ想像させる。一種の描写になつてゐるの
だ。簡潔な語句を注意深く配置することでそれが可能となつた。

仁七郎の敵討成功談には、特筆すべき工夫や表現が少ない。仁
七郎が佐太右衛門は自分がねらつて来た敵だからなにとぞ譲つて

頂きたいと頼むのに、丹右衛門が「慮外なるでつちめ」と乱暴に
はねのけ、たまりかねた仁七郎が斬りかかると、「丹右衛門倒惑
して其義ならば相待べしといふ。」この丹右衛門の言葉が彼の卑
劣さを露呈し、少年の純粹さと対比された大人のいやらしさをあ
からさまに示している。それ位のものである。

仁七郎が佐太右衛門と丹右衛門の果し合いの報を聞き、おつ取
刀で駆けつける時の道行めいた七五調の情景描出も、さほど効果
的であるとは言えない。「暮ての道の臙月帰鳥はるかに響つゞき。
沢田の蛙雨を乞……」きまりきつた言葉で木工左衛門が討たれて
ほど一年経つたことを教えるが、ここにこのくだりが置かれたの
は、作品をここで具体的な場の中に置き直して展開させようと
したからである。ずっと後の「石塔の手向水をむすび口に灌所へ」
も同様。前に「少年の塚のみ立竹の哀れに詠め」があつたから、
同じ場所を強調しているわけだ。それに叙述に或る間を置くには
このようなきまり文句の情景描写は都合がいいのである。

以上「人指ゆびが三百石」は伊織若い頃の、地味で公けにはな
りにくく人に真価を誤解されることもありそうな武勇談と、仁七
郎の、敵討とそれを邪魔した侍の二人を続けざまに討ち取るとい
う誰しも賞讃の声を惜しまぬ武勇談の二話を書く。仁七郎自身自
分の手柄を充分意識し、「二つの首を長刀にて小者にかづかせ」て
帰国したとされている。いかにも少年らしく勝ち誇つた態度であ
る。見てきたように西鶴内心の価値観からすればどうやら伊織の
方に軍配を挙げたいだろうが、読者が両者の対比にさそわれるこ
とはまずないだろう。仁七郎の敵討はそれほど派手で圧倒的だか
らである。伊織の面目、仁七郎の武勲ともに何の欠陥もない。こ
の二話はこの上なくめでたい話である。木工左衛門の討死は暗い
悲劇性を後に残すことが全くない。仁七郎が敵佐太右衛門を探し

出すのに一年かかっているが、これは短い方だし、「さまべくの難義」に遭ったとしても、いずれも敵討にはつきものいけば型通りの難儀に過ぎず、読者の印象に強く訴えることがない。仁七郎の運命はすべて型通り、いわば典型的な敵討談とも言えるだろう。

十三

巻三の第二「按摩とらする化物屋敷」も言わば軽い話である。ここでもめでたく敵は討ちとられる。梶田奥右衛門は念友大津兵之助に助けられ苦心惨憺敵を探すが、いかにして敵討ちを果たすべき事件が発生したかについての記述が全く欠けていることもあって、話はそれほど深刻にならない。冒頭のエピソードは敵討とは全く無関係の、ただ奥右衛門の大胆さを語るだけのものである。だが奥右衛門と化狸のやり取りは出色の筆で描かれ、読む者に強い印象を残す。

其後十四五なる女と顯れ貞宗の刀孫六の大脳指拵の有のまゝ持来りて、自は此御屋敷の片陰に住者なり今迄は人をたぶらかし此打物奪取しが何事もおぢさせ給はぬ御心中又ためしなき御侍向後悪心さつて世の人にわざを致さじ。此まゝに住なれ穴御借あそはされ下されよと尻聲短く申にぞ。奥右衛門おかくして初は年へし狸なるべし。其理りならばゆるし置也弥人に形を見する事なけれ。今宵は殊更淋敷に夜すがら是にて語れといやがるを引とゞめ。無心なれ共頼むと明かた迄肩をつたせければ。後には狸あくびして自から面影まことをあらはし。身の毛立てにげ行それより何の事なくおさ

まりし。

直前の「八角の牛の形」で寝ている奥右衛門に近づいた時には、奥右衛門も捕まえてやるうと油断なく身構えていたから緊張があったが、ここでは彼もすつかり打ち解けてのんびりした気分が漂っている。両者の様子や心理状態も的確に表現されている。特に重要なのは引用の中心部分にある「尻聲短く申にぞ。奥右衛門おかくして」である。狸の長広舌の声の調子を一語で要約し「尻聲短く」、それを聞いた奥右衛門の感情を一語で言う「おかくして」。この二語でこの場面はにわかには引きしまり読む者にすべてを伝える。「尻聲短く」とはいかにも十四五才の娘の言葉らしくもあり、狸としては習い覚えたせりふを懸命にその通りに唱えている滑稽な様子もうかがえる。だから奥右衛門の「おかくして」はこの上なく自然である。狸を引きとゞめて肩をつたせたのも、ゆったりした呑気なその場の雰囲気からいかにもありそうな事となる。奥右衛門は女に化けた狸を長時間引きとめておいたならいざれ正体を現すだろという計略も少しはあったのかも知れないが、せつかく人に化けた狸だ、もう少し見ていたいという気になるのは当然だろ。狸の反応を示す「いやがるを引とゞめ」「後には狸あくびして」、身の毛立てにげ行の三語もそれぞれ前の語とのちよつとした意味上の齟齬が表情豊かにその場の情景を表現している。敗者狸の方は奥右衛門を恐がっているが、それもそんなに強くななく、あくびが出、油断の気持からうっかり術が解けて狸の姿にもどつたから、慌てて逃げていったわけだ。以後何事もなかつたというのも当然である。

西鶴はなぜこの一話の冒頭にこのような場面を置き光彩あふれる文章でそれを表現したのか。もちろん奥右衛門の勇氣と沈着ぶ

りを伝えるためである。忘れてならないのは、西鶴の時代には狐狸が人に化けたり人をたぶらかすことを大多数の人々が信じ怖れていたというのである。我々にとつては、奥右衛門が評判の化物屋敷に平気で住み込んだことはなるほど当時としては勇敢な行動だったのだろうと納得するが、化狸と奥右衛門のあのようなり取りを読むと、これがなぜ勇者の証明になるのか分らない。西鶴が狐狸は怪異を起こすと信じていたかどうかは別として、もしそういう事実があつたとしても怖いことなぞ何もないではないか、一度でもそれを体験してみたいと思つていたくらいであらう。狐狸による怪異談はちつとも怖いことなどなく、むしろ楽しいとさえ言える。その際筆が楽しげに走るのには、実は西鶴にはここでは奥右衛門の勇気を賞讃するのは別に一つの意図があつたからである。すなわち、突然奥右衛門にふりかかった兄の敵討という義務なるものが、化物退治などいかに異なつた大変な仕事だったかを言おうとする。そのためには化物退治の方は楽々と片付けられたとした方がよいのか、化物退治も奥右衛門のような勇者にのみ可能な大変な仕事だったが、敵討の方は比較することもできないくらいな大仕事だったと書くべきなのか。もちろん後者の方が辛苦に満ちた敵討の意味をより強調するが、怪異をあまり信じないらしい作者はつい前者に傾き、読者にとつても、時代により後者から前者へ意味が次第に移つてきている点は否定できない。

奥右衛門の遠縁の者からの早飛脚による急報はいかにも突然らしいあわただしさだが、これによつて奥右衛門の運命は大きく転回する。

當月二日牛の上刻の事。御同名奥之進殿不慮の喧嘩。相手は戸塚宇左衛門即座にうつて立のく。風聞仕るは方人数多の由其

者分明ならず。

兄奥之進が打たれたのはただ「不慮の喧嘩」と言っただけである。これほど簡単な説明は『武道伝来記』三十二話中これだけである。巻一の第二「毒薬は箱入の命」の末尾で、森之丞の兄森右衛門が「不慮の喧嘩」で相手三人に討たれ、弟分市丸の助けをかりて森之丞が敵討に成功するとあるが、これはあの一話の本題ではない。本題の敵討は小梅の弟九藏が姉の敵と形部をねらい失敗する話の方である。「按摩とらする化物屋敷」で敵討の因となる先行談が書かれていないのは、敵討の主体たる主人公による狸退治が書かれているからである。いきなり否応なく振りかかった敵討の義務である。細かな発生事情、争いの詳細や正否のありかなどを切り捨てることによつて、これは化狸事件と同一平面に並べることが辛うじて可能になった。だがこの全く性質の異なる二つの武勇談を時間の順に並べることによつて、この人物の人間像はこれほど僅かな丁数文字数では考えられない程の深みを持つこととなつた。

急報を受けるや否や藩主の許可を得、翌日にはもう敵探の旅に出発している。化け狸をとつちめるときには超人的と言えるほどの力と冷静な判断力を示した奥右衛門も、敵探しとなるとそううまくはいかない。

土佐にも行讀岐にも越さまく身をやつし敵の有家を尋ねしに。深く身を隠してしがたく。二年あまり心をつくせしかひそなく。むなしき年月を爰にて送る無念なり。

狸退治のエピソードでの奥右衛門には「無念」などという感慨

さえ想像できない程だったから、ここで我々は勇者奥右衛門の新しい別の一面を目にすることになる。このことは以後何度かくり返される。

この時代の侍だから奥右衛門も当然男色者であり、四国に滞在中彼は天津兵之助という少年と念友関係になり、「此世の外まで申あはせて心中残さず互にうちとけしうへに。敵つ子細を語りければ。」とこの少年をも敵討にまき込むこととなる。この少年の登場により奥右衛門は二人一体ということになり、敵を討つ者の心理や行動は、より細かにまた鮮かに照らし出され表現される。奥右衛門は大病に倒れ危篤に陥り日夜兵之助の手厚い看護を受けるが、こんなことも化狸を屈服させていた頃の彼の姿からは想像もできなかった。奥右衛門がまだ病床にある間だから敵宇右衛門に遭遇したとき兵之助は一人で戦い、相打ちに両者左の腕を失う。こうなつては兵之助も奥右衛門を介さずじかに宇右衛門と敵対関係に立つことになるわけだ。両者とも左の腕ということは、兵之助宇右衛門の相互性を強調するし、兵之助は奥右衛門の敵を取り逃がしてしまつたことを無念がる余り、また自分も片腕を失くしてしまひこれでは武士を立ててゆくことも出来まいと思つたか、切腹さえ考えたほどのだから。

兵之助の負傷が治りかけたころ奥右衛門もやつと病から恢復して杖にすがつて兵之助を訪ねてくる。「只ふたり此程つもる事のみ語るも聞も涙」敵のありかを探す者の苦勞が筆舌に尽くし難いことが強調される。盃かわしてのちげひにと兵之助につづみを所望する奥右衛門の姿は、狸にあんまを所望した時の彼の姿とそう変りはない。「居相撲」ということになつて奥右衛門が兵之助に抱きついて、左手の無いことによく気づいた時は「是はとおどろきいかなる事そと氣を取乱す時」とある。驚いたり氣を取乱

したりする奥右衛門は昔はなかつた。さらに兵之助が宇右衛門と出遭つた次第をはじめて物語つた時の奥右衛門は次のように書かれる。

奥右衛門涙に沈みしばし氣を取うしなひけるをやうくに本性になし。大事の身の敵を討ぬうち其心入よはしとしかれば。いかにもく宇右衛門目を打取ての後に分別有とてかけ出しを。袖にすがりて引とどめて

小憎らしいほど冷静沈着な奥右衛門はどこに行つたのか。宇右衛門に遭つて斬り合つたとき、奥右衛門はまだ病中だからと思案してすぐには報告しなかつた兵之助は冷静だつた。あの時の判断は全く正しかつたことがこれでわかる。奥右衛門が變つたのではない。いかなる勇者とは言え人間的弱さは持っている。それが少しづつ読者の目にも明らかになつてゆく。奥右衛門はこうして人間の魅力にあふれる侍の典型として確立される。それがこの一話の意味だつたことは明らかである。最初完璧な人物が劇的事件の続出によつて次第に人間味あふれる弱みを露呈してゆくという手法は、注意深く操作していけば魅力あふれる人間像を創出することになる。西鶴はそれをねらつたのだ。単に相手が人間ということになると化狸とは比較にならないくらい大変だというだけではない。遺憾ながら全三十二話中の一話、僅か数丁という分量ではその完全な成功はかなり無理だろう。それにしてもよくここまで表現できたものと感服のほかはない。

巻三の第三、「大蛇も世に有人か見た様」では、初めに書かれているすべての発端となる事件は以下の如くである。伊豫宇和島藩の侍たちが興に乗って小船で海へ出、大いに楽しんでゐるところへ、舟のすぐ下に「五丈ばかりの龍うねり廻り」に今にも舟を覆そうとした。その時槍をかまえて船先に仁王立ちとなり大音声に龍を叱りつけ退散させた勇者もいたというのに、恐怖にかられてみづともない姿をさらした侍も二人いた。このことは家中で評判になり、その後藩士数名が世間ばなしにふけっている夜、臆病侍二人の噂も出て一座がどつと大笑いの時、二人のうち一人の子息成川瀧之助が人知れずそれを聞いてしまい、声の主は久米田新平に間違いないと判断し、これを父を侮辱した敵と決めて討つ機会を狙つこととなる。

「龍」については特記すべき点は何もない。例によつてこうした怪しく不思議な動物に対する西鶴の懐疑的態度が表れている。この龍あるいは大蛇は俄かに嵐をよぶわけでもなく、昇天の気配も見せない。舟をひっくりかえそうとするだけで、いつの時代にも誰でも知っている鮫や鱸の大型のものといつても通じるだろう。西鶴は龍などと言っても単なる未知の生物に過ぎず、その存在に何の不思議もないと思つていたのである。巻二の第四の「人魚」と同じことなのだ。舟がひっくりかえりそうになつたとき、勇敢な石目弾左衛門は別として、他の侍たちもみな慌てふためいたはずで、成川専蔵と木村土左衛門がとくに目立つたのは、二人がおかしな事を口走り、専蔵の方はおかしな振舞いに出たからである。それを左に引用する。成川専蔵の方は、

船頭をあらけなく呵てこんな所へ来て来るものか夕の夢見あしきにこまといふたを。女共がそれでは約束の義理が欠る

といふて此様なこはい目をさせると啼出すと着物みなぬきて大小にくゝりつけ横鼻禪まで放して

もう一人の木村土左衛門は、

またかたはらより初も残りおほい事は瓢箪をもつて来ればまざくと水を飲ては死ぬ物をと悔む何も心にかゝる事はなけれど祝言してから十日にもならぬ女ぼうが晩から淋しからふと涙ながら我屋敷の方を詠めやりとてもち共は水心はしらぬと手を懐に入れて舷に寄かゝつて念仏くりかへし

二人ともひとり言にあのような言葉を吐かなければ臆病ぶりがあれほど評判にならなかつたはずだ。「若き衆の悪口に臆病なる事を。夕の夢み十日にならぬ祝言とはやり詞にしなしける」は、二人がああ通りのことを他人にも聞こえるように口にしたことを示す。

ところでそもそもその発端となる事件だといふのに、この場面さほど光彩ある筆で書かれているとはいえない。突然海が荒れて舟が転覆しそうになつた状況と、二人の臆病者が慌てふためいた様子がつくり一致していないように思われるのだ。成川専蔵が泣きながら着ている物を全部ぬいで大小の刀にくくりつけ、ふんどしまで外して泳ぎ仕度をしたとあるが、この緊急の大事の折にどこにそんな時間的余裕があつたか、分かりにくい。それに二人とも、あんな事を他人に聞かれて記憶される程はつきり口に出して言つたというのも不自然である。木村土左衛門の、念仏を唱えながら舷側に寄りかかっている姿はいかにもありそうな動作で自然だが、その前の、祝言して十日にならぬ女房云々のせりふは別

の人物でもよかつただろう。瓢箪を持ってこなかつたことを後悔しているのも土左衛門だから、一人で三つの態度を引き受けるのは不自然でもあり、ちよつとくど過ぎもする。「夕の夢見」と「十日ならぬ祝言」という二つのキーワードもあまりに陳腐すぎる。このくだりは臆病者を生彩をもって描き滑稽さの極致を現出することもできただろうが、あまりうまくはいっていない。だがそれは西鶴の失敗ではなく意図だったとも考えられる。これについては後に論じる。

この一話で特筆すべきは、瀧之助が父専蔵の臆病話に触れずに、巧みに久米田新平を自分の相手とし、果たし合いに引きずり込むくだりである。剣道の練習試合で、

新平おとなげなくせいで品柄といふては疵かつかぬによつて其證據しれず。生若輩なる口よりいはれぬ事をいはんより。勢を出せばつみしれる事瓜の蔓に茄子はならずとつぶやくを瀧之介猶きかめたくみなればいなたとへを承はることに品柄では證據のしれぬとは真劔では拙者得いたすまいとおほすか弓矢八幡のがし申さずよく寛へ給へと三云捨て帰り。

舟遊山で舟が沈みそうになつたときの専蔵、土左衛門のせりふに比べても比較にならぬくらい新平の独り言はリアリティーに満ちている。巻五の第二にも似た表現の出でくる「いはれぬ事をいはんより」など今日では正確な意味がやや分かりにくいにも拘らず、全体がどういふ方向の意味でどういふニュアンスをこめ、どんな表情で言われたかさえよく分かる。新平のつぶやくとそれに対する瀧之介の返答、作者はここに精髓を込めた。

この一話にはもう一つ考えるべき点がある。『武道伝来記』を

順に読んでくると、ここで出てくる衆道なるものが前話「按摩とらする化物屋敷」でそれと大きく違っていることに気付かざるを得ない。瀧之介が夜分兄分井田素左衛門を訪ねひそかに玄関まで来たとき、素左衛門宅には数名の来客があるらしく話し声がする。ふと耳に入った話題は、父親専蔵が舟遊山の際のみつともない臆病ぶりの次第だったので、

はつと思ひ。暫したゝすみて聞届くれは親仁侍の一分も立ず腰抜の取さた座中大笑ひなれば。是堪忍ならぬ所よしく是までと降つゞく雨にそほぬれて座を立を待かけ物の見事に打果さんと思ひながら。いやく此事をいひつりてかふなる時はいよく親仁の卑氣恥の上の恥辱こゝは分別所なり。かへつて不孝の科をのがれず。堪忍ならぬ所なれ共胸をさすり歯をくひしり。所詮今の物語は久米田新平相手に不足なしと無念ながら宿に帰り。其後素左衛門新平に逢とも色に出さず時を過しぬ。

瀧之助が「物の見事に打果さん」と思ったとは誰を打とうというのか。先客として素左衛門宅にいる侍たち全員だろう。では主人素左衛門自身はその中に入っている侍たち全員だろうか。「座中大笑ひ」つまり皆いつせいにどつと笑つたのが聞こえたから、そういう時の瀧之助としてはこの笑声は敵意に満ちたものと感ぜられたに違いない。念者素左衛門にも裏切られたと明瞭に意識したかどうかは分からないが、ここでは世間全体が自分の敵になつてしまつたから、素左衛門だけが味方であり続けるなど考えもしなかつたろう。「其後素左衛門新平に逢とも色に出さず時を過しぬ」と、新平だけでなくわざわざ素左衛門の名が記されているのはそのことを示

す。素左衛門の方では皆と一緒になつて瀧之助の父を笑ひ者にしようなどという気はなかつた。そのことを読者はすでに知らされている。弟分の瀧之助が今夜行くと手紙をよこしたから楽しみに待っているのに、客がなかなか帰ろうとしないので閉口していらしている。「いづれもの長座気の毒の所へ」とはつきり書かれている。これが最後の果たし合いのとき、それを耳にした素左衛門が瀧之助の助太刀に駆けつける事情へと通ずる。

一旦は父を笑ひ者に行っている侍たちを切り捨てようと思ひながら、そんな事をしたらかえつて父が笑ひ者になると思い返し瀧之助は久米田新平一人に相手をしよる。これはいささか無理だが止むを得なかつた。上の文で、「打果さんと思ひながら」から「所詮今の物語は久米田新平」までの文章の長さは、考えるまでもなく新平が敵と即座に意識されたわけでない事を示そう。大体父親が臆病者と取沙汰されそれが家中全体の話題となつたら、いかに口惜しくてもその仇を取るなど無理なのだ。ここでは面白おかしく語っているのが久米田新平ということで新平を相手と決めたと書かれているが、「相手に不足なし」というから、単に家中でも評判の剣士だつたから半ば無意識のうちに選んだとも言える。

前話の梶田奥右衛門は弟分兵之介に自分が敵を探している身であることを打ち明け、兵之介は奥右衛門の敵手左衛門を己が敵とする。ここでの瀧之助は大きく異なつてゐる。「其後素左衛門新平に逢へども色に出さず時を過しぬ。」ほとんど素左衛門も敵の一人と感じているほどだ。どつと父を笑う声を聞いたのは素左衛門の屋敷だつた。それを思えば敵を新平ではなく素左衛門と決めつけても間違ひではなかつた。瀧之助は素左衛門が心中客を早く帰したがっていたことはまるで知らなかつたのだから。それ故敵は新

平としたのはやはり念者に対する遠慮　ひとつの想いがあつたのも事実である。

果たし合いが決まつたとき、瀧之助が素左衛門といろいろしめし合わせていけば、完全な勝ちかどうかは別として結果は違つていただろう。新平の弟分弁四郎の登場はそのことを痛感させる。弁四郎も新平としめし合わせたわけではなく自分独りの判断で来たのだから、素左衛門と同じことで、偶然弁四郎の方が僅かに早かつた。それが決定的だつたが、完全な偶然か何か意味があるのかはわからない。何も書かれていない。

果たし合いの場面は読者を誘ひ、多くの意識的無意識的な心理的意味を想像させる。それは西鶴の意図である。弁四郎はそれまで瀧之助と互角に戦つていたのに名を名乗つた途端打たれてしまふ。首を切り落とされるという決定的なやられ方である。何故か。こんなことは斬り合ひでは別に不思議でもなかつただろうが、何故だろうと考える読者がいたとしたら皆ほぼ同じ理由に達するだろう。瀧之助は弁四郎を弁四郎と知つたから切り伏せることができた。それまでは弁四郎を新平と信じていたから致命的な一撃を加えることができなかった。さらにここで今一度何故かを考えることができる。なぜ新平に致命的な一撃を加えられなかつたのか。これには答えがいくつもある。瀧之助には新平の方が自分より力が上だという意識があつたからか。それよりもひとつの解釈として思いつくのは、新平を敵と肝に銘じ、いかに激しく憎んでいたとしても、そもそも新平を敵と決めつけたことに無理があつたのではないか、ということだ。新平が敵といふのは果して正しいのか。例えば積極的に父専蔵の臆病ぶりを声高に笑つる者はいなかつたとしても、新平以上に敵にふさわしい者は家中にいくらもいたろう。そのことが無意識のうちに刀の切っ先をほんの僅か鈍らせ

たのではないか。次に、瀧之助を間一髪救った素左衛門が新平と斬り合いを続けじきに斬られてしまう。ちょっとあつげな過ぎる感があるがこれは何故か。実力に圧倒的な差があつたことは想像できる。剣の腕前では自信家らしい瀧之助が「相手に不足なし」と認めていたのだから。しかし心理的解釈を加えるくせがついてしまった読者にはず、次のような解釈が可能だ。新平の弟分弁四郎は先程斬られてしまつてゐる。素左衛門の弟分瀧之助は苦戦中とはいへまだ生命を取られてはいない。新平は弟分の仇といふことで阿修羅のようになつてゐる。一方素左衛門は瀧之助の助太刀に來たのだが、このところ弟分瀧之助と心をひとつに通わせ一心同体の状態になることが少ない。これは両者の剣の勢いの差となつて現れるのは当然だろう。次に、危なかつた瀧之助が絶命前に奇蹟的に新平を討ち取ることができたのは何故か。素左衛門が助太刀に來たからだ。素左衛門に対してさえ瀧之助はあまりすつきりしない感情を持つていた。それも苦戦の原因の一つだったが素左衛門が「素左衛門なるはと勢を付」危いところで瀧之助を救い、そのまま討たれてしまふ。心理は説明されていかにせよ、必死の戦鬪のさなか瀧之助の胸中には衆道のままことが甦つたのは間違いない。「口惜くも爰にて兩人共に討るゝ社本意なけれ。」兩人という意識が復活しているのだ。最後に、あのような結果になつたのは何故か。これは完全な私闘だから、もし勝つたとしても瀧之助の切腹は当然である。彼の性格からして他国への逃亡は考えられない。切腹によつて彼の勝ちが決定する。だが現実には、瀧之助には切腹するもう一步の力が残つていず、そのまま絶命したから、勝ちでなく相討ちということになつた。これもやはり新平を敵と決めたことの非合理性が、無意識のうちに自身の勝ちをぎりぎりの所で妨げたのではないか。

以上のような説明は可能な一解釈に過ぎない。しかし西鶴がこういう解釈も可能なように技巧を凝らして書いているのも事実である。瀧之助が新平を父の敵と定めたことと、素左衛門の玄関先という場所の偶然、これはもちろん作者の意図である。それが瀧之助の意識的無意識的心理を微妙に曖昧なものとした。さらに語り手の語調に、敵討の運命を進んで引き受ける瀧之助への同情と譴歎があるため、表現は一段と複雑となつてゐる。しかしすべてが西鶴の意図だつたとしても、西鶴は作中に謎を仕掛けたわけでは決してない。答えが出てゐるわけではない。知的遊戯と見ては間違いない。では何か。ただひたすら現実に近づけよつとしたのだ。傍觀者の目に映ずる現実世界には、ある瞬間には事の経過に心理的必然が貫かれてゐるよう見え、次の瞬間にはすべてが偶然としか見えない、このような事はざらにある。西鶴は作品にそれを実現しようとし、異様な現実味を与えた。

(未完)

平成十二年十一月稿